

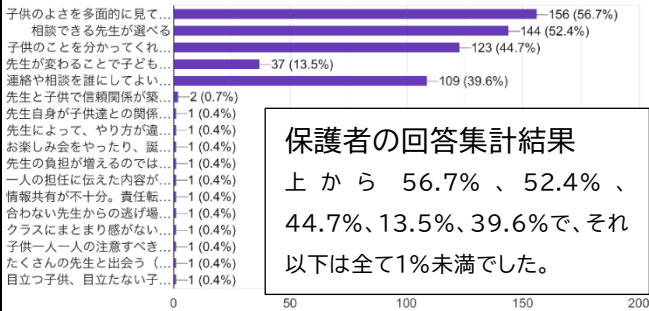
一西だより



豊川市立一宮西部小学校通信
令和7年9月5日 第14号
発行;校長 村上謙一

【学校評価アンケート結果から その2】

⑭担任がローテーションすることで、あてはまると思うことすべてにしをつけてください。
275件の回答



保護者の回答集計結果

上から 56.7%、52.4%、44.7%、13.5%、39.6%で、それ以下は全て1%未満でした。

前号では児童と教職員の結果から、子どもの多面的な見取りについて肯定的な結果が表れていることをお伝えしましたが、保護者についてもその効果を感じいただいているようです。しかし、自由記述では「たくさんの先生と出会う(関わる)ことができ良いと思う」と、この制度を推進する立場からはありがたいお言葉をいただく一方で、以下のようなご心配の声もあります。「情報交換ができていないのかが不安。先生の負担が増えるのではないか。先生によってやり方が違うと迷うことがある。お楽しみ会をやったり、誕生日のお祝いをしたり、今までクラスでやれていたことがやれなくなっているのは寂しいと感じる。どの先生も担任というよりは、どの先生も担任ではない感じがして、誰に相談すればよいのか分からない。クラスにまとまり感がない、先生達が業務的。先生自身が子供達との関係を作るのに苦労しているのではないか。目立つ子供、目立たない子供には目がゆくが普通に当てはまる子供達の事をどれほど気に止めていてくれるかが疑問です。」

制度に万能なものはありませんので、これらの言葉を真摯に受け止め、よりよい制度設計に努めます。他にも先進校と共通するご指摘がありますので説明をさせていただきます。

「**担任がいなくて責任の所在が不明**」→担任を固定しないだけです。担任はいます。複数が順番に担任を務めることで、責任感や指導が薄くなったり弱くなったりするのではなく、教員と児童の関わりが多重多層になり、個別最適な支援が可能になります。

「**誰に相談してよいかわからない**」→これまでの担任制が相談しやすかったと感じる方がいる一方で、相性のせいか、相談しにくくて困る方もいた現実があります。チーム担任制では相談相手選択の自由度が増しています。ご相談は「〇年〇組担当をお願いします」または相談相手をご指名いただいてもかまいません。

【8月2日みんなの学校 木村泰子先生講演から】

本紙8号の紙面でお伝えした会に参加しました。昨年4月の本校での講演とお考えは変わりませんが新たな発見がいくつもありました。**太字**は木村泰子先生の言葉です。

「**この子のために、という指導は一瞬で暴力に変わる。だれが一番困ってる？この子が自分の子供やったらどうする？大人が「この子のために」と言っている厳しい指導は、指導する自分のためではない。**」自分の過去を振り返って客観視すると、恥ずかしながらその通りです。

「**みんなの学校は、地域の大人が当たり前にいる学校。**」本校には心強いサポーターが日常的に活動されています。

「**まわりの母親が、困っている母親とどれだけ手をつなげるのかが問われている。**」困る子供は困っている子供です。その母親も困っています。困る子や親から距離をとるのではなく、手をつないで支えるのです。そんな温かい学校でありたいと思います。

「**勝手にしゃべるな、勝手に動くなという教室は刑務所と同じと感じる子どもがいることを忘れないでほしい。みんながいっぱいしゃべり、いっぱい笑うと息が吐ける。息が吐けると呼吸ができる。そんな教室にしませんか。**」みんなが気持ちよく学ぶには、学習規律を整える必要があります。でもその学習規律はだれのためのものなのか。一人ひとりの子供が学び続ける主体であるためのものであるならば、学習規律は一人ひとり異なるものであってもいいのかもしれませんが、むずかしい宿題をいただいた気持ちです。

「**多数派の価値観を少数派に押し付けている共生社会をつくっていく子どもは育たない。障害で言葉がでない子が気持ちを伝えられないのではなく、気持ちをわからない人の方に障害があると考えられませんか。**」それでも私にはわかりません。でも、分かろうとする姿勢はもてます。自分の本性に差別意識がある現実を受けとめるところからしか人権教育が始まらないことを再認識しました。

「**全ての子どもが無理せずに行ける学校が公立の学校です。**」そんな学校づくりのために、先生と地域の大人が手を取り合って、子どもを支える学校づくりを続けていきたいと思っています。